

2020 年度一般研究助成 研究報告書
ストーカー未然防止のための調査研究

研究代表者

岡山県立大学 小畑 千晴

共同研究者

徳島文理大学 青木 宏

作新学院大学大学院 中島 富美子

1. まえがき

警察へのストーカー(以下ST)相談は、2016年度以降2万件を超え、ST事案への対応強化が社会的に求められている。しかしこの数字には、報告されない暗数の多さが指摘されていることや、被害者の約4割は20代の若者世代であることを踏まえて、研究グループは2018年に徳島県警察本部とともにST行為等に関する共同研究(3年間)を行うための協定を締結した。初年度には、県内の大学及び専門学校に所属する学生(18~25歳)約千人を対象にST被害調査を実施、被害実態と支援体制のニーズ及び課題を明確にした。この結果を踏まえ、自身の被害程度の確認と相談先を明示した「ST被害防止テスト」を警察と共同して作成、若い世代に対する被害者支援のための活動を始めた。

ただし、2016年12月に改正された「ST行為等の規制等に関する法律」のなかで、加害者を対象にした調査研究の推進(第10条)等が新たに追加されたように、この問題の本質的な解決のためには、被害者側のアプローチだけでなく、加害者側が抱える心理的問題に着目することが求められている。また、ST行為に関する研究課題として、質的研究の少なさ(小林,2018)、ST被害者加害者の二者関係を考慮する必要性(城間ら2017)、さらにST行為の根本的心理メカニズムを理論的説明に焦点を当てた研究の必要性(Christina L. Patton et al,2010)が挙げられている。

ST行為は、アメリカにおいてドメスティック・バイオレンス(以下DV)と合わせて”Intimate Partner Violence(IPV)”と表現され、親密関係者の中で起きる犯罪行為として理解されている。研究代表者は、これまで「原子価論」(ハフシ,2010a)という臨床心理学理論より、DV問題の二者関係に基づく発生メカニズムの解明とDVパターンの類型化(小畑,2007,2008,2011,2016,2017)、さらに若い世代の親密関係の間で起きるデートバイオレンスの加害傾向を測定するための尺度「Likelihood to dating violence scale」の作成(小畑,2013)等を行ってきた。以上の知見とST研究の課題を踏まえ、臨床心理学の視座よりST行為について検討した。

具体的には、ST行為はその多くが元交際相手や知人など関係性がある二人の間で起こる事案であることから、STの発生機序を加害者の面接を通じて、パーソナリティ特性やそ

の力動について検討した（調査1）。加えて、若者におけるパートナーとの関わり方についての意識を把握し、誰もが可能性を孕んでいるST加害者にならないための予防教育活動に役立てるために、大学生を対象に親密な関係性に関する質問紙調査を行った（調査2）。

2. 原子価論の概要

2-1 基本的概念

本研究では、臨床心理学の中でも英国対象関係論の流れを組む、ハフシメッドによる原子価論(2010a)の立場から ST 行為について検討を行った。そのため、本理論について簡潔に紹介する。

理論名にある「原子価(Valency)」とは、Bion.W(1961)が個人とあらゆる対象との繋がり方を説明するために、化学用語を転用した心理学概念である。Bionによれば、原子価とは自発的で衝動的な要素であり、努力や訓練を必要としない人間行動における本質的部分とした上で、「確立した行動パターンを通じて、他者と瞬間的に結合する能力」と定義した。これに対しハフシ(2010a)は「(外部的・内部的)対象との一定の安定した形(類型)」による繋がりと関係を可能にする個人的な心的(無意識的)準備状態」と再定義し、対象関係及び対人関係を成立させる要素を説明する独自の理論「原子価論」として発展させた。原子価論は対象関係論および対人関係論に立脚し、人と人との繋がり方を可能にする「原子の水準」に焦点を当て、構造、類型そして心理療法についての理論が含まれている。

2-2 性質と類型

原子価論によれば、健康的な原子価(Plus Valency(+V))と病的な原子価(Minus Valency(-V))に区別される性質がある。更に、人との繋がり方には主に4種の類型、「依存原子価(Dependency Valency; DV)」「闘争原子価(Fight Valency; FV)」「逃避原子価(Flight Valency; FIV)」「つがい原子価(Pairing Valency; PV)」がある。それぞれ、相互依存、直接的、葛藤回避、親密な特徴を持ち、対象の結合の在り方が異なる。+Vの場合、4種をすべて有しながら、人と繋がる際に多用する1種である「活動的原子価(Active Valency; ACV)」と、状況や場面によって使い分ける3種の「補助的原子価(Auxiliary Valency; AXV)」によって構成され、安定した対人関係を結ぶことができる特徴を持つ。+Vにおける主体と対象との繋がり方は建設的であり、両者の心的成長へ通じるが、一方の-Vではむしろ逆であり、両者は破壊的かつ攻撃的で結果的に対人関係への崩壊をもたらす。-Vの原子価構造には、ACVを示せない「未分化の原子価」、どの原子価も十分に示せない「過小の原子価」、あらゆる状況において1種の原子価だけを強烈に表現しつづける「過度の原子価」の3形態がある。以下に記す-Vの記述は、過度の原子価の場合である。

2-3 各原子価類型の特性

1) 依存原子価

依存原子価(DV)がACVである場合、低い自己評価、他者への過剰評価、相互作用的依存によって他者と繋がろうとする。基本的に自己評価が低く、そのために他者を理想化し、

他者に頼っていくしかないように振る舞う傾向がある。また他者に受け入れられ愛されたいという欲求が強いために、他者の意見に合わせようとする傾向が強い。本基本特性を、自分が他者の役に立つ事を喜びと感じ（「他者への貢献」）、援助を必要とする人に対する敏感さや理解（「高い共感性」）、「周囲への同調」という形で表現することができれば+DVとして機能していると考えられる。一方、「他者への貪欲な期待と要求」、孤独への過度な不安と恐怖の結果、「強烈な分離不安」「無力感」として現された場合には-DVとして機能していると考えられる。さらに-DVは、相手のためにすべてを捧げるがその期待に添わない場合、相手を責めさらに貪欲的要求を繰り返し、最終的にその関係は崩壊する。

2) つがい原子価

つがい原子価(PV)では、強い好奇心、親密さ、楽観主義等の特徴がある。この原子価は、人とは親密に深く繋がろうとする傾向と、「性」が他者と繋がるために重要な要素であると信じているので、異性に対するアピールや目立ちたいという欲求が強い。-PVの主な特徴は、親密な身体的、精神的関係に対する過度な欲求、傲慢さ、性に対する強迫観念である。そして、対象に対する脅迫的で主体と対象両方にとって破壊的な「知りたい願望」である。-PVによる相手とのつながりは、そのすべてを把握し知り尽くすことであり、相手について知らないことに出会うと、拒絶される不安や分離不安を感じ、耐えることができない。したがって、貪欲的に秘密のない対人関係を目指し、傲慢さに満ちた「他者探求」をすることになる。さらに-PVは、人との繋がりにおいて性が重要であり、性と誘惑が他者とのつながるための唯一の手段であるという幻想を抱く。すなわち、-PVは、自分だけでなくすべての人にとって性というものが不可欠だと信じているので、あらゆる事柄を性愛化して考える傾向にある。

3) 闘争原子価

闘争原子価(FV)は、強い自己主張、積極性、攻撃性、競争心等の特性がある。この原子価をACVにする人の対人関係は積極性や活発性を発揮して、自分を表現し相手をリードして他者と繋がろうとする傾向にある。一方、-FVの基本的特徴は、対象への意識的かつ無意識的不信感と敵意である。利己主義的で自分以外の相手は、自分のために利用する道具のように扱う傾向にある。対象に対する肯定的感情の代わりに、自己の非現実的な自信や高い自己評価を示す。さらに相手への非難、批判を繰り返し、頑なに自分の意見が正しいと信じ主張し続ける。従って、話し合いを通して相手の意見を受け入れたり、そこから学んだり共感することができない。

4) 逃避原子価

逃避原子価(FIV)には、葛藤回避、逆依存的、独立性の重視、プライバシーの重視等の特性がある。この原子価をACVにする人は、人との関係の中で生じる葛藤を避けるために、距離を持ち、人には頼らないことによって繋がろうとする傾向がある。他者との協調よりも、自分らしくありたいことを望むために、他者評価より自分の価値観を重視する。-FIV

は、-FV と同様に社会に対する不信感や敵意を抱いているが、その表現方法が異なり、受動的な攻撃性を示して対象と繋がろうとする傾向がある。-FIV はその不信感ゆえに他者を頼ることができず、愛情や愛着を感じないよう抑える傾向にある。なぜなら、その対象が不在になったときの虚弱な自己が露呈することを恐れるためである。そのため、過度に自分の情報を相手に伝えることや感情を抑え、近寄りがたい印象を人に与える。人との接触は望むが、他者と心理的距離を近づけることは、自己愛が弱い自己への侵入とそれに対する攻撃として体験されるので、-FIV は他者との間に心理的壁を作り、親密な関係を避けることによって自分を守ろうとする。

上述した分類は、ハフシに倣い、闘争と逃避を異なるものとして区別したが、Bion(1961)は闘争と逃避の関係を1枚のコインの表と裏のような関係と捉えていた。いずれも人との繋がりに関する基本的発想は、敵やライバルが存在することであり、その違いは、勝つか負けるか、戦うか避けるかのアプローチの方法に過ぎないと述べている。

3. 調査1：ストーカー行為の発生メカニズムに関する検討

3-1 目的

調査1は、臨床心理学の視点からSTの発生メカニズムの解明を試みるために実施した。先行研究の多くは、STの原因を加害者のパーソナリティ特性に焦点が当てられていたが、本研究では二者の力動に焦点を当てて検討する。

3-2 対象者と期間

共同研究機関である徳島県警察本部によるST事案相談件数は3年間（2018(H30)年～2020(R2)年）で500件であり、ST規制法が適用された事案は、文書警告48件、禁止命令29件、検挙24件である。このうち、文書警告・禁止命令・検挙されたST事案の概要40事例を分析対象にする。事例の内訳は、加害者41人*（男性37人、女性4人）、被害者40人（男性3人、女性37人）である。加害者の平均年齢は、41.8歳(SD=16.6)、被害者の平均年齢は33.9歳(SD=11.7)である。そのうち、心理検査のみ同意した人は、加

Table1 研究対象者

	加 害 者			被 害 者		
	男	女	合計	男	女	合計
40 事例	37	4	41*	3	37	40
心理検査	28	4	32	2	25	27
面 接	7	3	10	—	—	—

*加害者複数の事例あり

害者 32 人（男性 28 人、女性 4 人）被害者 27 人（男性 2 人、女性 25 人）である。心理検査と面接に同意した人は、加害者男性 7 人、女性 3 人の計 10 人である。なお、面接依頼は加害者のみに行った。調査は 2018 年 7 月から 2020 年 11 月に実施された。

3-3 方法

1) 心理検査

個人の原子価を測定するためのアセスメントテストはハフシ（2010b）によって開発された「Valency Assessment Test(VAT)」を用いた。文章完成法の質問紙であり、合計 25 の問がある。項目の内容は、FV、PV、DV、FIV の 4 種類の原子価に関する項目から成る。例えば、「リーダーが太郎を助けようとしたとき太郎は…」に続く文章を自由に記述する。記述された内容はハフシ（2010b）によってマニュアル化された採点基準に基づいてすべての項目を 1（否定的明白な行動）から 8（肯定的明白な行動）に得点化した後、平均を算出、4 種の原子価の中で平均点が一番高いものが対象者個人のもつ ACV として決定される。

2) 加害者面接

各警察署や警察本部内相談室に研究者と警察官が同席のもと、半構造化面接を行った。質問項目は、加害者と被害者が知り合った経緯、交際の経過、ST 行為を始めた契機、ST 行為をしているときの気持ち等について尋ねたが、面接参加者の返答に応じて個別に質問を追加した。面接時間は約 60 分であった。2019 年 2 月から 2020 年 10 月において実施された。

面接に同意した人の属性は、男性 7 人、女性 3 人であり、年齢は、10 代 1 人、20 代 4 人、30 代 2 人、40 代 2 人、50 代 1 人であった。その内、有職者 6 人、無職 4 人であった。被害者との関係については、元交際相手 5 人、知人・友人 2 人、勤務先の同僚・職場関係者 3 人であった。また、同居家族の有無については、同居家族等がいる者 6 人、いない者 4 人であった。

倫理的配慮として、対象者には、研究の趣旨を説明したうえで、参加者へは任意であること、質問への回答拒否や面接の中断は可能であることを文書と口頭で伝え、同意書への署名・提出を依頼した。得た情報は匿名化し、個人情報保護と管理に努めることを保障した。なお、徳島文理大学倫理委員会の承認を得ている。

3-4 結果と考察

1) 心理検査結果

ハフシ（2010）により開発された VAT のマニュアルを使用し、心理学者 2 名によって採点した。その結果、加害者は、DV19 人、FV1 人、FIV5 人、PV7 人、であり、被害者は DV17 人、FV5 人、FIV2 人、PV3 人であった。その内、面接に応じた加害者 10 人の原子価類型は、DV6 人、FV0 人、FIV2 人、PV2 人であった。

Table2 加害者及び被害者の原子価類型

	原子価の類型				合計
	依存 (DV)	闘争 (FV)	逃避 (FIV)	つがい(PV)	
加害者	19(6)	1(0)	5(2)	7(2)	32(10)
被害者	17	5	2	3	27

* () 内は面接者の採点結果である。

2) 考察

40 の事案概要の内容分析、心理検査の結果および加害者の面接等を通じて、ST 行為の心理機制について検討し 2 つのパターンが見いだされた。

依存型 ST (Dependency type of Stalker ; DST)

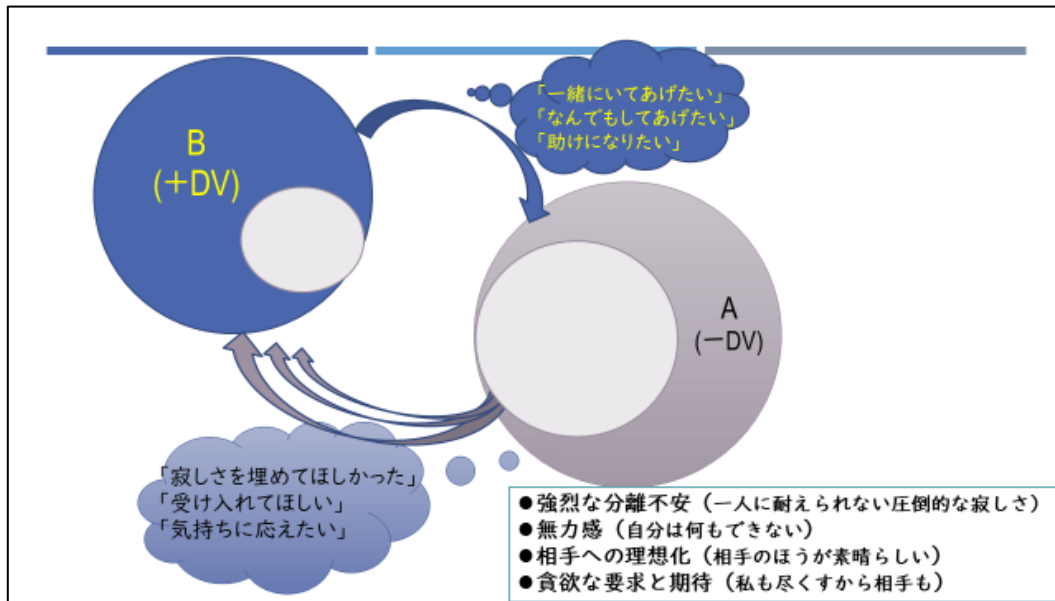
—DV の特徴は、自己評価の低さと無力感から、自分 1 人では何もできず、誰かの存在がなければ生きていけないという幻想を抱いている。そのため、自分の周りにいる人を理想化し、頼り、一人にならないように努力する。そして、自分の弱さを露呈することで、相手に依存的要求を受け入れさせ、相互依存的な関係を構築しようとする傾向がある。

交際相手との関係は、相手が自分に好意を持ち、相手に望まれ、必要とされていると感じたときから始まる。「最初は好きじゃなかったが交際した」との発言もよく聞かれる。しかし、交際が始まると、献身的態度と相手なしでは生きていけないかのような無意識的意識的メッセージを送り、相互依存によって良好な関係を維持することができる。従って、DST は交際関係の始めから ST 行為が問題となっていたわけではなく、関係性の変化によって生じるタイプであり、ST 行為発現までに 3 つの段階があると考えられる。以下 A と B の二者の心理力動を交え説明する。

< 第一段階 関係良好期 >

互いの同意に基づき、良好な親密関係にある時期である (Figure1)。A は、「良い自我部分」を相手に分裂排除(split-off)し、投影同一化(projective identification)によって、無力感や自己評価の低さを感じる。そして理想化により、相手が優しくかつ頼もしい存在としてみなす。「守ってほしい」「受け入れほしい」「寂しさを埋めてほしい」などの発言は、それらを表しているといえる。B は、A の期待に応えられるよう、「一緒にいてあげたい」「何でもしてあげたい」「助けになりたい」と、A の頼りになり、守ってあげる存在として行動を示すようになる。

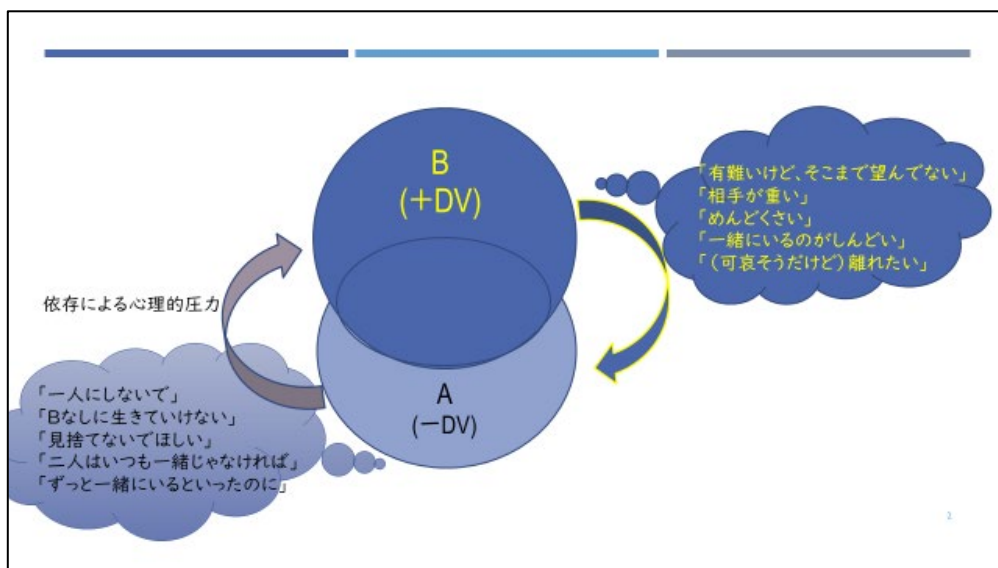
Figure 1 依存型 ST 発生機序：第一段階 関係良好期



<第二段階 関係危機期>

A の献身的態度や優しさが B にとって重荷や不満へと変化する時期である (Figure2)。A にとって、親密関係にある相手は一心同体であり、いつも一緒にいて互いに尽くし尽くされるような関係を望む。しかし A のこうした態度が、B にとっては次第に「有難いけど、そこまで望んでいない」「(気持ちが)重い」「一緒にいるのが窮屈でしんどい」と感じるようになり、心理的にも物理的にも距離を置こうとし、別れを匂せるようになる。A はそれを無意識的意識的に感じ、「一人にしないでほしい」、「B なしでは生きていけない」、「見捨てないでほしい」等と自分自身の弱さを示すことを通じて、相手が離れて

Figure 2 依存型 ST 発生機序：第二段階 関係危機期



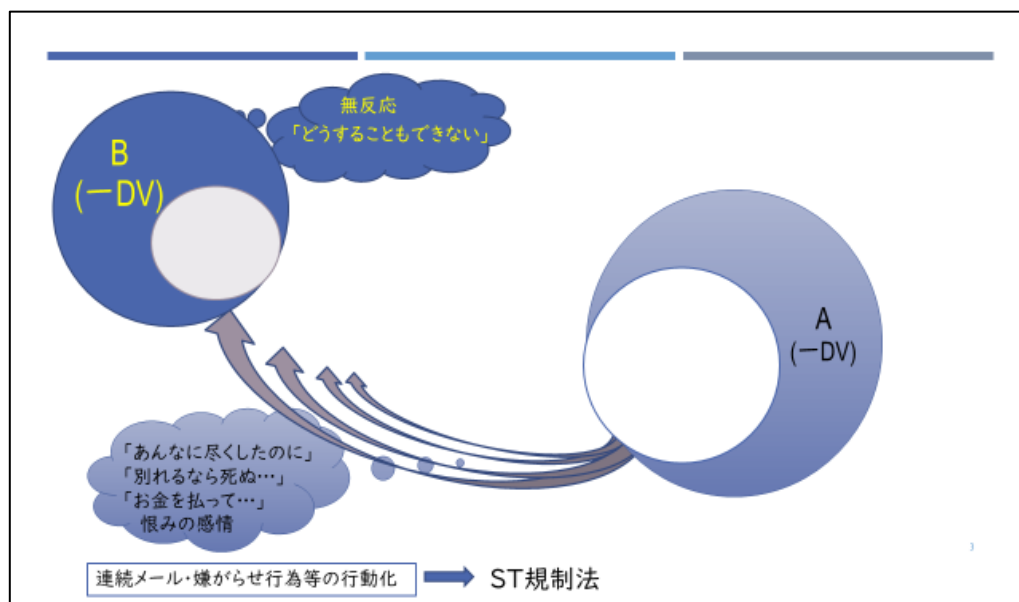
いかないようプレッシャーをかける。そのため、Bは別れを決めても、その願いによって思いとどまり、関係の継続を了解する場合もある。Aは貪欲的に相手に依存し、Bと距離のない関係を求める、こうした関係性は、個人が対象と離れると心的ダメージを受け亀裂が生じるために、対象とくっついて離れようとしない、「粘着性(附着性)同一化 adhesive identification」(Bick,1986,Meltzer,1975)と関連する。

<第三段階：関係崩壊期>

2人の関係は一時的に戻る場合もみられるが、最終的にBはAとの別れを決断し、それを伝える段階である(Figure3)。AはBに対してこれまで以上に訴え、最終手段として「あんなに尽くしたのに…」「別れるならば死ぬ」などの脅しや、別れるならばせめて「お金を払って」と同棲中の生活費の要求やデート代でかかった多額の費用等を求める場合もある。しかし、Aの目的は、金銭ではなく、お金を通じてBとの繋がりを保つことである。AがBを振り向かせるために行う頻繁なメールや電話連絡および嫌がらせ行為は、Bにとっては気持ちますます離れ、無反応へと導くので、結果的にAの行為がST行為と受け取られるようになる。この状態に陥ると二人では解決不可能となり、時に第三者を巻き込むような行動へ発展し、警察へ相談しなければならない状況となる。

この場合のST行為の意味は、自分が一人にならないよう相手が自分の傍にいてくれて、どこまでも自分を受け入れてほしい『貪欲な甘えと孤独回避』がその目的になっていると考えられる。

Figure3 依存型 ST 発生機序：第三段階 関係崩壊期



事例提示 (以下に紹介する事例は、実例ではない。多くのST事案概要と、それに携わった方々から伺ったこと、関連する文献などから創作されたものである。)

女性 X 子（30 代後半・会社員）は、男性 Y 夫（50 代前半・会社員）と婚活サイトで知り合った。X 子は数か月前に離婚したばかりで、「寂しさを埋める存在がほしい」と思っていたころ、Y 夫からアプローチされ、交際が始まった。仕事が終わると、毎日のように互いの家を行き来し、週末には Y 夫の趣味であるアウトドアを楽しむようになった。X 子は、当初屋外での食事や寝泊まりは好みではなかったが、積極的にアウトドア用品や服を購入して、彼に合わせるための努力をした。Y 夫からは、夜中に会いたいと言われたらすぐに出かけ、終電を逃して家に帰れないと言われたら、どんなに遠くでも車を走らせ迎えにいった。それも、すべて Y 夫に受け入れられ、自分から離れていかないようにするためだった。

しかし、ある日 Y 夫からと別れを告げられた。理由は、「お前といるとしんどい。他に好きな人ができた」だった。すると X 子は交際中にかかった費用、プレゼント代などを返してほしいと高額な金銭を要求し、それが支払えたら別れてもいいと伝えた。その一方で、「もう一度考え直してほしい」「見捨てないでほしい」と訴えるようなメールを何度も送り、電話もかけ続けた。数回はこうしたやりとりの後に関係が戻ったが、その後 Y 夫は X 子からのメールや電話に一切反応しなくなった。

すると X 子は Y 夫の職場で待ち伏せし、後をつけて Y 夫の行動を監視するようになった。Y 夫が不在時には、家の玄関にプレゼントと手紙を置き、買い物中には声をかけて復縁を迫るつきまとい行為を繰り返すようになった。さらに、Y 夫の職場に、Y 夫を誹謗中傷するような手紙を何度も送り付けた。すると今まで X 子のあらゆる行動を無視していた Y 夫からようやく X 子に連絡がきた。その内容は X 子を罵倒する内容だったが、X 子は、「内容よりも、返事があったことが嬉しかった」とつぶやいた。Y 夫からの相談を受けた警察は、X 子に対して ST 規制法の禁止命令を行った。X 子は警察官に、「悪いことだとわかってはいたけれど、Y 夫を失うのが怖かった。こんなに尽くしてきたのに、私を 1 人にするなんて…。1 人になるのが怖かったから。自分を止められなかった」と語った。

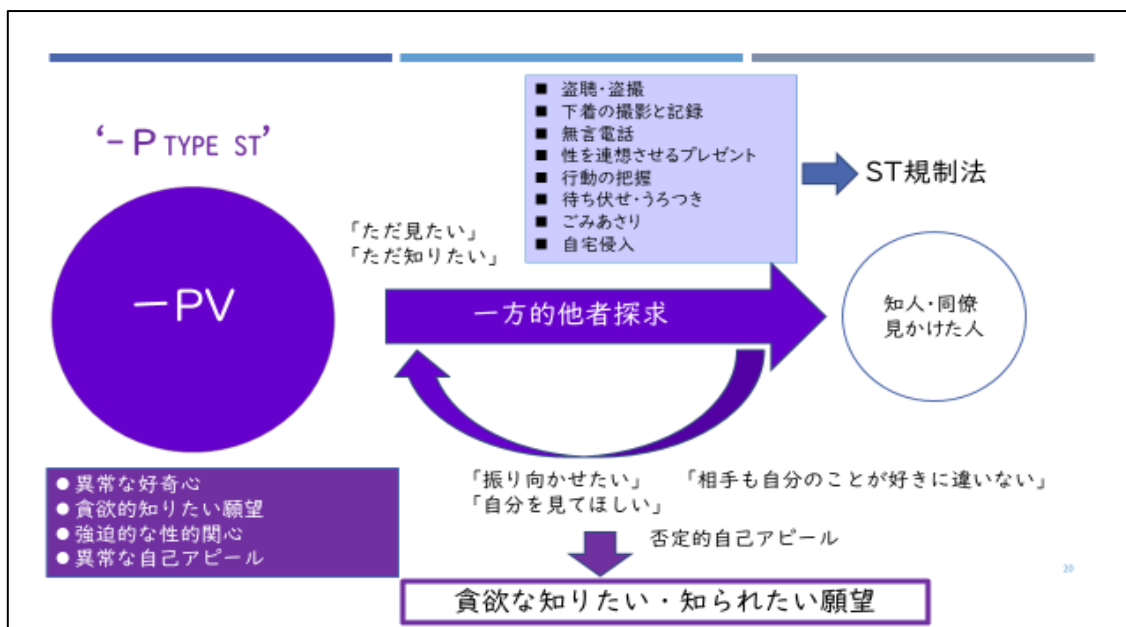
つがい型 ST(Pairing type of Stalker ; PST)

ST 行為の対象は、交際婚姻関係がなく、見知らぬ人、同僚、知人、店員と客などの場合で多くみられるパターンである (Figure4)。

—PV の基本的特徴として、異常な好奇心、貪欲的な知りたい願望、強迫的な性的関心、異常な自己アピールなどの特徴がある。つまり、相手を知り、自分を知ってほしいという欲求が強く、それらは相手に配慮することなく一方的に行われる。また過度に楽観的な特徴があるので、相手に好意を伝えて拒否されてもめげず、何度でも繰り返してアプローチし、反対に自分を知ってもらうために好きな相手に嫌がらせ行為を通じて自分の存在を示す場合もある。時に恋愛妄想も見られ、警察官から口頭注意や警告等を受けたとしてもそれ

を信じず、相手は自分を好きに違いないと思いつける。さらに、病理が進むと自分でもわけがわからないほどに、相手につきまとい撮影しなければならないといった強迫観念を示すようになる場合もある。

Figure 4 つがい型 ST 発生機序



以上、相手に対して直接的にアピールする場合もあるが、盗撮や盗聴など間接的に行われる場合もある。相手の不在時による住居侵入、ごみあさり、相手の自家用車にGPSを付ける行為等であり、相手の知らないところで情報を得ようとする行動である。しかし、これらの行動を繰り返す中で、本人は隠れているつもりだが相手が気づくように撮影し、無意識的に自分の痕跡を残して、自分にたどりつくようにする場合も見られる。

このタイプの ST 行為の目的は、自分が相手を知ることであると同時に、最終的には自分の存在も相手に知ってほしいという「貪欲な知りたい・知られたい願望」であるため、発覚した場合の社会的影響を理解していても、その衝動を抑えることが難しい。

事例提示

男性 Z 夫（50 代・会社員）は、高校卒業後に技術者として就職し、勤務態度は真面目である。妻と子供はいるが、数年前に離婚し、一人暮らしをしていた。同じ職場に女性 W 子（20 代・会社員）が働き始め、挨拶を交わしたことが契機となり、Z 夫は W 子に好意を抱くようになった。数年たったある日、W 子が結婚することを知り、「そんなことは聞いていない」と思った。それ以後、Z 夫は、W 子の勤務時間、勤務日、帰宅時間をチェックして、W 子のスケジュールを把握するようになった。そして、W 子が家に帰る姿をみるために、自宅周辺をうろつくようになった。その行為が W 子本人に知られ、職場の

上司から注意を受けたが、止めることができなかった。

仕事が休みの日には、結婚した W 子の自宅、実家、通勤風景、買い物姿を写真に収めるようになり、「W 子がいつ、どこで、何をするか知ることによって気持ちが満たされたのです。相手を支配したような感覚になり、優越感にひたることができたから」と語った。Z 夫の行動に W 子は不安と恐怖を感じ、警察に相談、Z 夫は警察から文書で警告を受けてもなお止めることはなかった。むしろ行動はエスカレートするようになり、仕事を抜け出して W 子の自宅の撮影が日課になった。W 子が出したごみ袋をあさるようになり、そこから入手した W 子の携帯番号に、毎日無言電話をかけた。さらに、W 子の車のタイヤに火をつけ、検挙されることになった。一連の ST 行為を続けた理由を「彼女が何をしているか、知らずにはいられなかった。恋人になってほしいとか、付き合いたいという気持ちは最初からないのです」と語った。

3-5 小括

ST 事案の概要と面接調査により、ST の 2 つのパターンと ST に至る過程、その目的の違いについて説明をした。この結果から、現場の警察官は、同じ ST 規制法に触れる行為であったとしても、動機が異なることを類別できるようになれば、一律的な対応ではなく、必然的に相手のパターンに応じた働きかけを行うことが可能になると考えられる。

ただし、ST には上述したパターンのみでなく、他の可能性も考えられる。しかし、今回の事例概要および調査面接数から提示できたのは上述した 2 つのみであった。また、調査協力者は、社会的にも仕事を継続して行っている人や処罰も軽いケースが多く、ST 加害者すべてのパターンを網羅しているとは言えない。限定されたなかでのモデルであり、引き続きの検討が求められる。

4 調査 2 : ST 予防に向けたパートナーとの関わり方に関する質問紙調査

4-1 問題と目的

2020 年度警察庁に寄せられた ST 被害相談の約 4 割は 20 代であり、加害者は元交際相手など親密関係にあった人が 5 割を占めている。本研究では、ST を含む親密関係でのトラブルの未然防止を目的に、若者の親密な相手に対する質問紙調査を実施した。

1) 原子価類型に関する調査

個人の原子価を測定するためのアセスメントテストはハフシ (2010b) によって開発された「Valency Assessment Test(VAT)」の簡易版を用いた。選択式の質問紙であり、15 の問から構成される。項目の内容は、FV、PV、DV、FIV の 4 種類の原子価に関する項目から成る。例えば、「リーダーが太郎を助けようとしたとき太郎は…」の後に続く文章を、提示した 8 つの選択肢の中から自分の考えにもっとも近いと感じるものを 1 つ選ぶ。マニュアル化された採点基準に基づいて得点化した後、平均を算出、4 種の原子価の中で平均点

が一番高いものが対象者個人のもつ ACV として決定される。

2) 依存型 ST 傾向尺度作成過程

これまでの ST 加害者傾向に関する調査は、交際経験があり、なおかつ相手から別れを切り出された条件を設定し、つきまとい等行為の有無を問う調査であった（越智,2019）（鈴木,2019）。これらの調査は、交際が破綻した後に行われる ST 行為の実態把握を目的にした尺度であるため、当然のことながら交際経験のない人は除外されている。本研究では、高校生や大学生を対象に ST 未然防止に向けた活動を目的にしているため、そのためには、交際経験の有無を問わず、すべての学生が回答することができ、自分の将来の恋人やパートナーとの関係の在り方を自分自身が認識し、気づきにつながるような質問紙が必要である。しかし、国内外を見てもこの視点に基づく質問紙は論者の知る限りない。

質問項目の記述の収集および質問紙項目の作成は「ST 事案の被害実態等に関する調査研究報告書」（日工組社会安全研究財団,2017）等を参考にした。さらに、犯罪心理学の専門家 2 名、臨床心理士 1 名が日ごろ ST 事案の十分な経験を持つ生活安全部警察官から、交際関係・非交際関係それぞれの ST 事案に分け、加害者が共通して主張する発言・内容を集め議論した結果、計 11 項目を作成した。

質問の教示内容には、「以下の項目は、あなたが恋愛関係において以下のような行動を行う可能性がどの程度あるかを想像し、当てはまるところに○を付けてください。なお、項目の中の相手とは、あなたの心の中にある想像上の「彼」あるいは「彼女」を指しています」と記載した。それぞれの項目について、「1：決してしないだろう」「2：多分しないだろう」「3：するかもしれない」「4：きっとするだろう」の 4 段階評価で回答を求めた。

3) ST 関連行動に関する意識調査

小畑・中島(2021)が指摘する依存型 ST 行為は、突然 ST 行為が始まるのではなく、交際した二人の期間によらず、親密関係の継続と別れを契機に発現する。そのため、依存型 ST の場合、二人の心理的過程を踏まえる必要がある、これまで多くの研究者たちが関係性を考慮した理解と対応の必要を指摘してきた。そうした二人の心理力動を理解するために、ST 行為に関連する質問について、ST 行為の「能動的行為者 Active Actor;AA」（自分が交際相手に対して ST 関連行為をすること）、「受動的行為者 Passive Actor;PA」（交際相手から ST 関連行為を受けること）の視点から回答を求めた。

さらに、好意を抱く相手から明確に「会いたくない」と交際を拒否されている場合における行動についての意識も尋ねた。相手の家に行くこと、待ち伏せすること、繰り返しメールや SNS で連絡すること、自分の気持ちを伝えるために自傷行為などをすることを質問項目に挙げた。これらは、頻度と内容によっては、ST 規制法に触れる行為である。また、現場で対応する警察官からの要望として、それらの好意を何度でも許せると回答した人にその理由が知りたいとの声があり、複数回答で理由についても尋ねた。

4-2 調査期間と対象者

2020年6月から2020年10月に調査した。対象者は、X県内の大学および専門学校に在籍する18-25歳までの学生である。回答を得た861人のうち、年齢や不備のある回答を除いた800人（男子243人／女子557人）を分析対象にした。平均年齢は、20.29歳、SD=1.40である。

本調査への参加は自由意志とし、無記名で実施した。倫理的配慮として、調査前に回答を拒否することができること、質問紙への回答と成績などが無関係であること、および個人を特定せず研究以外の目的には使用しないことを口頭と文書で明示した。なお、徳島文理大学倫理委員会の承認を得ている。

4-3 結果と考察

1) 個人の原子価の測定

個人の活動的原子価を特定するために、ハフシ(2010b)により開発された原子価査定テスト(Valency Assessment Test; VAT)の簡易版を使用した。

マニュアルに沿って採点された各原子価の人数はTable3のとおりである。依存原子価が388人（男性111人、女性277人）、闘争原子価が46人（男性16人、女性30人）、逃避原子価が64人（男性24人女性40人）つがい原子価が204人（男性62人、女性142人）である。

各原子価類型にばらつきの問題があること、先で述べたように、Bion(1961)によれば、闘争と逃避原子価が同類に扱われていたことがあることから、闘争原子価と逃避原子価を同じ類型として扱い、闘争-逃避原子価110人（男性40人、女性70人）で分析することとした。不明とは、簡易版テストのため、採点の際に2種の原子価が同点になることがあり、活動的原子価を判定できなかった人数を指している。

Table3 原子価査定テスト（簡易版）採点結果

	原子価の類型				
	依存	闘争-逃避			つがい
闘争		逃避			
男性	111	16	24	62	
%	15.8	2.3	3.4	8.8	
女性	277	30	40	142	
%	39.5	4.3	5.7	20.2	
合計	388	46	64	204	98

2) 依存型 ST 傾向尺度の分析

質問紙の 11 項目について、主因子法 Varimax 回転によって因子分析した結果、固有値の差を基準として 3 因子解を採用した。そして因子負荷量が 0.40 以下の項目は削除した。Table 4 に因子分析結果を示した。クロンバックの α 係数は第 1 因子 0.86、第 2 因子 0.76、第 3 因子 0.76、であることから尺度の信頼性があるとした。

第 1 因子は、「相手から別れを切り出されたら、自分の悪いところを直すからと言って、別れないよう努力する」「別れを切り出されたら、どうにかして自分のところへ戻ってきてもらうために努力する」「別れを切り出されたら、その人しかいないと思うので必死にすぎる」の因子負荷量が大きいことと、これらの項目は、交際相手と別れる状況において、必死に相手をつなぎ止め、相手にくっついて離れようとしめない態度が含まれているため、「**附着的連結**」因子とした。

第 2 因子は、「別れを切り出した相手に、自分の好きな気持ちを伝えるために嫌がらせをする」「相手がどうしても別れると言ったら、自分がしてあげたことを何かの形（お金・物）で返してほしいと言う」「別れを切り出されもう会えないと言われても、相手に会いに行く」「別れを切り出した相手が、自分以外の人と親しくなるのは我慢できない」「別れを切り出されたら、相手にとって一番に好きじゃなくてもいいから一緒にいてほしいと言う」の因子負荷量が大きかった。これらの 5 項目は、交際相手との別れに際し、相手に対して嫌がらせや交際の見返りの要求、相手の意思を無視して関係を希望するなど、相手への好意の気持ちを諦めることができない故の反応であると考えられる。以上の行為による繋がりは、愛情というよりは二人にとって否定的な結果による繋がりを維持が目的であると考えられるため、「**破壊的連結**」因子とした。

第 3 因子は、「交際相手には、懸命に尽くす」「交際相手が望むことは、何でもしてあげる」の 2 項目は交際相手への関係性が、相手中心であることを示していたことから「**献身的連結**」因子とした。

これらの 3 因子は、ST の面接によって明らかにされた依存型 ST の 3 段階と一致している（小畑、中島 2021）。それによれば、依存型 ST が発生するためには、第一段階の関係は、相手とは献身的な関係、第二段階は離れていこうとする相手にくっつくようにする附着的な関係、最後は別れを決断した相手に対し、嫌がらせや金銭の要求などを通じて否定的に繋がろうとする破壊的連結を維持しようとする 3 段階があることを指摘した。

3) 原子価と依存型 ST 傾向尺度因子の関係

各原子価と依存型 ST 傾向尺度の因子との関係をみるために、依存型 ST 傾向尺度の因子分析によって抽出された 3 因子の因子得点を求め、各因子の平均値と 3 種の原子価と一元配置分散分析を行った。その結果を Table 5 に示す。

Table4 依存型 ST 傾向尺度因子分析結果

	項 目	因子負荷量			寄 与 率 (%) 累積寄与 率(%)
		I	II	III	
4	相手から別れを切り出されたら、自分の悪い ところを直すからと言って、別れないよう努 力する 附着的連結	.902	-.153	-.015	39.97
5	I $\alpha=0.86$.835	-.108	.018	39.97
6	別れを切り出されたら、どうにかして自分の ところへ戻ってきてもらうために努力する	.817	.054	-.003	
11	別れを切り出した相手に、自分の好き な気持ちを伝えるために嫌がらせを する	-.121	.776	-.047	
9	II $\alpha=0.76$	-.193	.691	-.047	16.57
8	破壊的連結 自分がしてあげたことを何かの形(お 金・物)で返してほしいと思う	.317	.525	-.070	56.54
10	別れを切り出した相手が、自分以外の 人と親しくなるのは我慢できない	.143	.494	.150	
7	別れを切り出されたら、相手にとって 一番に好きじゃなくていいから一緒 にいてほしいと言う	.352	.402	.025	
2	III 献身的連結	-.068	-.082	.886	8.54
3	$\alpha=0.76$.085	-.013	.696	65.08
	交際相手には、懸命に尽くす				
	交際相手が望むことは、何でもしてあ げる				

まず、第1因子の附着的連結因子において有意な差がみられなかった。(F(2.699) = 1.24, p>.05) 依存原子価(M=2.21, SD=.76)、闘争逃避原子価(M=2.07, SD=.93)、つがい原子価(M=2.16, SD=.78)であった。

次に、第2因子の破壊的連結因子では、依存原子価と闘争-逃避原子価に有意な差が認

められた。

最も平均値が高いのは、闘争-逃避原子価(M=1.55, SD=.58)であり、次いでつがい原子価(M=1.45, SD=.49)、最も低いのは依存原子価(M=1.41, SD=.46)であった。すなわち、闘争-逃避原子価の被験者は、交際相手からの別れの決断後も、自分の好きな気持ちを一方的に伝え続ける傾向が高いことが明らかになった。

次に、第3因子の献身的連結因子では、依存原子価(M=2.90, SD=.69)、闘争逃避原子価(M=2.71, SD=.82)、つがい原子価(M=2.90, SD=.67)であり、依存原子価と闘争-逃避原子価、闘争逃避原子価とつがい原子価に有意な差がみられた。すなわち、闘争逃避原子価を ACV にする人は他の原子価に比べて、交際相手に対する献身的な態度が弱い傾向にあることが明らかになった。

Table5 3 因子と原子価類型の分散分析

	附着的連結因子			破壊的連結因子		献身的連結因子	
	度数	M (SD)	多重比較	M (SD)	多重比較	M (SD)	多重比較
依存原子価	388	2.21(.76)		1.41(.46)		2.90(.69)	
闘争・逃避原子価	110	2.07(.93)		1.55(.58)	*	2.71(.82)	*
つがい原子価	204	2.16(.78)		1.45(.49)		2.90(.67)	+

+p<.10 *p<.05

4) 原子価と ST 関連行動に関する意識調査

交際相手との交際中に撮影した画像や GPS アプリのインストール等が、関係終了後にトラブルに発展する事案が多いことから、現状を把握し、未然防止につなげる目的で尋ねた項目である。8つの問からなり、交際相手との関係について ST 行為の「能動的行為者 Active Actor; AA」になり得る項目と「受動的行為者 Passive Actor; PA」になり得る項目の二者の立場から回答を求めた。回答には、①許されない②やや許されない③やや許される④許される、の4件法で尋ねた。以下、①と②、③と④の回答をまとめて記載する。

「スマートフォンの通話履歴や SNS のやり取りをチェックすること」(SNS やり取りチェック)を、自分が交際相手に行うことについて、許されるとの回答は 20.5%、許されない 79.5%であった (AA 項目)。反対に、同様の行為を交際相手が自分に行うことを許されるとの回答は 34.8%、許されない 65.3%であった (PA 項目以下同様)。

「スマートフォンに GPS アプリをインストールすること」(GPS アプリのインストール)について尋ねた項目では、自分が交際相手に行うことを許されるとする回答が 13.7%、許されない 86.3%であり、交際相手が自分に行うことを許されるとの回答は 25.9%、許されない 74.1%であった。

「自分以外の (異性との) 関わりを制限すること」(関わりの制限)については、自分が

交際相手に行くことを許されるとの回答は 12.9%、許されない 87.1%であり、交際相手が自分に対して、交際相手以外の異性との関わりを制限することを許されるとする回答は、21.9%、許されないは 78.1%であった。

「行動を何でも知ろうとすること」(何でも知ろうとすること)を自分が交際相手に行くことを許されるとする回答は、27.2%、許されないは 72.9%であった。交際相手が自分に対して何でも知ろうとする行為を許されるとする回答は 40.4%、許されないとの回答が 59.6%であった。

「架けた電話やメール、SNS にすぐに返事をしない時に怒ること」(返事がないことへの怒り)を自分が交際相手に行くことを許されるとする回答が 15.1%、許されないは 85.1%であり、交際相手が自分に行くことを許されるとする回答は、21.4%、許されない 78.7%であった。

「正当な理由があり、相手を殴ったり蹴ったりすること」(正当な理由による暴力)の問いに、自分が交際相手に対して行くことを許されるとする回答は 5.3%、許されないとする回答は 94.8%であり、交際相手が自分に対して正当な理由があつて暴力を振るうことを許されるとの回答 6.6%、許されないは 93.6%であった。

「裸体を撮影すること」(裸体の撮影)を自分が交際相手に行くことを許されるとする回答は 4.1%、許されない 96.0%であり、交際相手が自分に行くことを許されるが 3.8%、許されない 96.3%であった。

最後に、「撮影した裸体の画像をメールや SNS で送るよう要求すること」(裸体画像の送信)を自分が交際相手に行くことを許されるとする回答は 2.2%、許されない 97.8%であり、交際相手が自分に行くことを許されるとする回答は 2.9%、許されない 97.2%であった。

以上の結果から、自分が交際相手にすることが「許されない」と思っている行動でも、相手から望まれたら応じると回答した割合が、すべての質問項目で高いことが明らかになった。交際相手から自分のスマートフォンをチェックされること(34.8%)、GPS をインストールされること(25.9%)、交際相手が自分の行動を何でも知ろうとすること(40.4%)などを構わない等 PA の回答結果からは、若い世代の交際相手に対して、過度に密着した、秘密のない関係性を望む傾向があると推察できる。そして、この背景には、相手の要求を受け入れなければ、親密な関係性を維持できないのではないかという不安が含まれていると考えられる。

以上の問を原子価別に分散分析を行った(Table6)。多重比較(Bonferroni 法)の結果、「正当な理由による暴力」および「裸体画像の送信」の項目において、依存原子価と闘争/逃避原子価間、闘争/逃避原子価とつがい原子価の間で有意な差が認められた。闘争/逃避原子価は、他の原子価よりも正当な理由があれば、自分が交際相手を殴ったり蹴ったりすることを許す傾向が強く、そして裸体の画像をメールや SNS で送るよう要求することが許す傾向の強さが明らかになった。

交際相手が自分に行う PA に関する項目では、「正当な理由による暴力」、「裸体の撮影」を問う項目において、依存原子価と闘争／逃避原子価の間で有意な差が認められた (Table7)。闘争／逃避原子価は、自分が相手に行うことと同様に、相手からの身体的暴力や裸体の撮影を許す傾向が高いことが明らかになった。

Table6 AA 項目と原子価類型の分散分析

	SNS やり取り チェック	GPS アプリの インストール	関わりの制限	何でも知ろう とすること	返事がないこ とへの怒り
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)
依存原子価	1.82 (.88)	1.54(.85)	1.52(.78)	1.94(.81)	1.62(.81)
闘争/逃避原子価	1.66(.95)	1.54(.95)	1.65(.92)	1.95(.91)	1.73(.91)
つがい原子価	1.75(.90)	1.50(.81)	1.50(.71)	1.91(.72)	1.58(.72)

	正当な理由による 暴力	裸体の撮影	裸体画像の送信
	M (SD)	M (SD)	M (SD)
依存原子価	1.18 (.55)	1.14(.50)	1.06(.35)
闘争/逃避原子価	1.45(.87)	1.27(.72)	1.20(.61)
つがい原子価	1.21(.55)	1.16(.43)	1.06(.29)

+p<.10 *p<.05

Table7 PA 項目と原子価類型の分散分析

	SNS やり取り チェック	GPS アプリの インストール	関わりの制限	何でも知ろう とすること	返事がないこ とへの怒り
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)
依存原子価	2.12(1.05)	1.84(1.04)	1.81(.90)	2.23(1.01)	1.76(.86)
闘争/逃避原子価	2.03(1.05)	1.73(1.01)	1.78(.94)	2.04(1.05)	1.86(1.00)
つがい原子価	2.13(1.05)	1.88(1.02)	1.71(.86)	2.22(1.02)	1.79(.88)

	正当な理由による暴力		裸体の撮影		裸体画像の送信
	M (SD)	多重比較	M (SD)	多重比較	M (SD)
依存原子価	1.19(.54)	←**	1.14(.48)	←+	1.10(.40)
闘争/逃避原子価	1.38(.77)		1.26(.60)		1.12(.42)
つがい原子価	1.24(.59)		1.18(.52)		1.11(.41)

+p<.10 **p<.01

好きな相手（元交際相手）から「会いたくない」と交際を拒否されているときに、次の4つのST関連行為はどの程度許されるかに対して尋ねた。

「相手の家に行くこと」については、1回も許されない(71.1%)、1回なら良い(23.6%)、2-3回なら良い(3.8%) 何度でも許される(1.5%)の回答が得られた。何度でも許されると回答した人に、その理由を尋ねたところ、「相手の気持ちが変わると思うから」(3人)、「自分でコントロールできないから」(1人)、「自分の存在に気づいてほしい」(1人)、「会いたいから」(1人)等の回答があった。

「相手を待ち伏せすること」(待ち伏せ)については、1回も許されない(82.0%)、1回なら良い(15.9%)、2-3回なら良い(1.9%) 何度でも許される(0.3%)の回答が得られた。何度でも許されると回答した人に、その理由を尋ねたところ、「相手の気持ちが変わると思うから」(1人)、「許されない行為じゃないから」(1人)の回答が得られた。

「メールやSNSで「会いたい」「やり直したい」と伝えること」(メール等で会いたいと伝えること)について、1回も許されない(20.4%)、1回なら良い(50.1%)、2-3回なら良い(24.5%) 何度でも許される(5.0%)の回答が得られた。

何度でも許されると回答した人に、その理由を尋ねたところ、「相手の気持ちが変わると思うから」(15人)、「傷ついた気持ちをわかってほしいから」(5人)「自分でコントロールできないから」(5人)「自分が納得したいから」(9人)、「自分の気持ちを伝えてほしいから」(1人)、「後悔したくない」(1人)、「お互いが納得するまで話し合いたいから」(1人)、「提案や意見を言うのは迷惑にならない」(1人)、「意思表示されることを制限されたくない」(1人)、「伝えることは悪いことじゃない」(1人)等の回答が得られた。

「自分の気持ちを伝えるために、自傷行為(リストカット)等をする事」(自傷行為)について1回も許されない(93.4%)、1回なら良い(2.8%)、2-3回なら良い(1.4%) 何度でも許される(2.5%)の回答が得られた。何度でも許されると回答した人に、その理由を尋ねたところ、「相手の気持ちが変わると思うから」(1人)、「傷ついた気持ちをわかってほしいから」(3人)「自分でコントロールできないから」(7人)「自分が納得したいから」(8人)、「個人の自由だから」(1人)等の回答が得られた。

以上の結果から、4項目の多くが1回も許されないとの回答を示す結果になった一方、何度でも許されるとする回答も一定程度見られた。その理由から見えてきたものは、好きな相手（交際相手）から「会いたくない」と拒否されているにも関わらず、相手の意思より自分の好意の感情を重視し、独りよがりな内容であった。理由の回答として多く見られた「相手の気持ちが変わると思うから」は、相手から拒否されていても、繰り返し相手の家に行き、待ち伏せし、メール等で接触しつづければ、自分を受け入れるに違いないという自己評価の高さと、楽観的な期待が伺える。「傷ついた気持ちをわかってほしいから」の理由には、自分の弱さを示して相手に理解されたならば、自分を受け入れてくれるだろうとする依存的期待によるものと考えられる。「自分でコントロールできないから」の回答は、メールやSNSでの発信と自傷行為の間で多くみられた。

上述したST行為に繋がる項目と原子価類型の分析結果をTable8に示した。原子価別に比較した結果、有意な差は認められなかった。その原因として、いずれの項目もST規制法によって処罰される可能性を含むため、回答に意識的な抑制がかけられた可能性があるためと考える。

Table8. 原子価類型とST行為の分散分析結果

	相手の家にい	待ち伏せ	メール等で会いた	自傷行為
	くこと		いと伝えること	
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)
依存原子価	1.36(.61)	1.22(.48)	2.11(.78)	1.11(.48)
闘争/逃避原子価	1.35(.69)	1.15(.37)	2.27(.87)	1.22(.66)
つがい原子価	1.39(.67)	1.20(.47)	2.15(.78)	1.13(.55)

4-4 小括

本調査は、大学生等を対象にSTを含む親密関係のトラブルを防止することを目的に実施した。その際、加害者面接調査の結果を参考にしながら、原子価論の性格類型の視座から検討を行った。まず、依存型STタイプを想定した依存型ST傾向尺度では、3因子が抽出され、「献身的連結」「附着の連結」「破壊的連結」と名付けた。依存型STが発生するための3段階である、献身的態度、附着的關係、破壊的連結と一致しており、尺度の妥当性を示す結果となった。当初、依存原子価を示す一群が他の原子価よりもその傾向が高くなるのではないかとの仮説をもっていたが、分析の結果はそれを支持する内容ではなかった。破壊的連結において闘争/逃避原子価がその傾向が高く、献身的連結において闘争/逃避原子価がその傾向が低いことが示された。

ST関連行動に関する項目についても、闘争/逃避原子価は、自分が交際相手に対して、

正当な理由による暴力および裸体画像の送信を相手に送るよう要求することを許される行為だとする回答が他の原子価よりも高く、交際相手による同様の行為（正当な理由による暴力と、裸体の撮影）を受け入れる傾向が高いことが明らかになった。その理由として、闘争／逃避原子価は、他者との繋がりにおいて自分が相手より優位性を示し、強い自己主張や攻撃性を示す特性があるため、上述した項目に含まれる行為を許す傾向の高さにつながったことが考えられる。

全体を通じて、原子価別に ST 関連行動を検討したが、有意な差があまり認められなかった。要因として、質問項目の内容が親密な相手に対することを尋ねており、回答のしづらさがあったことが考えられる。また、本調査は実施場所として大学の講義内にて説明され、教員に提出する実施環境が、一定程度その解答に社会的望ましさが影響したことも考えられる。引き続き、質問項目の再検討が求められる。

5 全体のまとめ

研究 1 による ST 事案概要と加害者面接によって提示した ST の 2 つのタイプは、ST 行為には同様の行為であっても、目的と発生過程が異なることを示した。警察官からは、何度 ST 規制法の説明をし、口頭注意したとしても理解してもらえない場合があると聞いており、このことは、警察官が ST 行為の被疑者に対応する際、役立つものになると考える。依存型 ST の場合には、その行為に至るまでのプロセスと理解が一定程度必要であり、つがい型 ST の場合には、貪欲的な知りたい願望の特徴を十分捉える必要があるだろう。すなわち、相手のタイプに応じてアプローチを変えていく必要が警察官には求められていると言えるだろう。なぜなら、被疑者にせよ加害者にせよ、警察官が相手の心理的特徴を理解したうえでの注意や警告でなければ、単にその場限りの返事や反発にしかならない可能性があるためである。相手が自分でもコントロールできない衝動を理解したうえでかける言葉は、相手に深く届くものになるはずである。本研究の結果は、警察官が加害者の特性、言動の理由や目的を理解するための助けになるものと考えられる。

現在、警察や医療機関が連携して、加害者への治療・カウンセリングを通じて再犯防止を防ぐ取り組みが動き出している。北海道警は 2015 年から ST 加害者に対し、受診の働きかけを進めているが実際に治療を受けたのは、3 分の 1 程度にとどまっている（朝日新聞朝刊,2021.10.9.）。警察庁による報告でも、2020 年に治療を働きかけた加害者 882 人のうち、治療を受けたのは 124 人であり、受診につながりにくいことが課題となっている現状も、上述した点と関わりがあるように推察する。

徳島県警察本部では、ST のタイプによる特性を認識して相談業務や捜査、そして ST 加害者に対する心理学的治療に繋げていくために、若手中堅の警察官を対象にした講習を始めており、結果を生かした取り組みをスタートさせている。

他方、教育分野においても警察と連携した取組は行われている。2021 年 1 月には、徳島

文理大学にて調査に回答した学生を含めた約 100 名を対象に、課題 2 の質問紙調査結果が発表され、警察本部担当者による防犯講習も同時に行われた。本調査の結果を踏まえ、徳島県警察本部は ST 行為の防犯活動を県内中学校・高校へ実施することを決め、現在 (2021.10.10) までに徳島県内の中学校 1 校、高校 1 校で実施している。

ST や DV など、親密な相手との間でおきるトラブルが二人の間で解決せず、警察が介入する事案の増加が指摘されて久しい。これら問題は、犯罪行為であるから問題であるだけでなく、身近で大切な人との関係性のあり方を問うものであり、人と人との繋がりを考える重要なテーマでもある。調査研究の対象にした若い世代は、これから家族をつくり、日本の社会を支える貴重な存在である。その第一歩が彼らの親密な関係づくりにあり、安定した親密な関係性の構築は、子どもと親との関係性にも反映される。そういう意味で、ST 行為に繋がらないための予防教育活動は重要である。国内をみても、DV の認知度は高く、中学校から DV 予防教育を実施している学校は少なくない。今後は、DV に ST 行為も含めた予防教育プログラムを実施していくことが課題である。

付 記

課題 1 は、2021 年 9 月日本心理臨床学会第 40 回大会にて発表した。

課題 2 は、2021 年 10 月日本犯罪心理学会第 59 回大会にて一部分析内容を変更し発表した。

課題 1 の面接調査結果、課題 2 の単純集計の結果は、徳島県警察本部 HP (pref.tokushima.jp) に公開されている。

文 献

Bion,W. (1961) Experiences in Groups. Tavistock Publications.

Bick,E.(1986) Further consideration of the function of the skin in early object relations; Findings from infant observation integrated into child and adult analysis. British Journal of Psychotherapy,2,292-299.

Christina L.Patton,Matt R.Nobles,Kathleen A,Fox.(2010)Look who's stalking;obsessive pursuit and attachment style,Journal of criminal justice,38(3),282-290.

ハフシメッド(2010a)「絆」の精神分析-ビオンの原子価の概念から「原子価論」への旅路,ナカニシヤ出版.

ハフシメッド(2010b)目に見えない人と人との繋がり-原子価査定テスト(VAT)の手引き-,ナカニシヤ出版.

小林大介 (2018) 日本におけるストーキング被害者の心理社会的状況に関する研究動向と課題, 東北大学大学院教育学研究科研究年報 67-1.

- Meltzer,D.(1975) Adhesive identification. *Contemporary Psycho-Analysis*,11,289-310.
- 日工組社会安全研究財団(2017) ストーカー事案の被害実態等に関する調査研究報告書, 日工組社会安全研究財団.
- 小畑千晴(2007) ドメスティックバイオレンスの発生要因に関する研究レビュー, 奈良大学大学院研究年報 12 号,p41-54.
- 小畑千晴(2008) 夫婦の連結からみた DV に関する一原因論—夫婦の原子価論に基づく実証的研究-奈良大学大学院研究年報 13 号,p107-120.
- 小畑千晴(2011)ドメスティックバイオレンスと夫婦の無意識的絆-女性相談所で一時保護された女性に関する原子価論からの一考察- *Psychophilia Journal*Vol.4,p19-26.
- 小畑千晴 (2013) デートバイオレンス可能性尺度の作成について,奈良大学大学院研究年報 18 号,p45-52.
- 小畑千晴(2016)DV 事例の分類—民間シェルターでの心理実践を通して—*Psychophilia Journal* Vol.7,p14-22.
- 小畑千晴(2017) .親密関係における暴力の分類-原子価論からのアプローチ-徳島文理大学研究紀要 93 号.p15-21.
- 越智啓太 (2019) 交際終了後のつきまと・ストーキング尺度の作成,犯罪心理学研究 57,116-117.
- 鈴木拓朗 (2019) ストーキング関連行動尺度の作成の試み,犯罪心理学研究 57,140-141.
- 城間益里,松井豊,島田貴仁(2017) ストーキングに関する研究動向と課題, 筑波大学心理学研究 54,39-50.